

16. 八朔祭礼：地頭町を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田尻, 佳之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4926

16. 八朔祭礼—地頭町を中心に

田 尻 佳 之

- I. はじめに
- II. 八朔祭礼の概要
- III. キリコ
- IV. おはやし
- V. 日付変更とその影響
- VI. おわりに

I. は じ め に

「祭り」には何故か夜がよく似合う。昼間でも祭りは行われているのに、あまりその光景が浮かんでこない。祭りの夜には出店（露店）が店を開き、往来する人々が店をのぞく。金魚すくいを楽しんだり、かき氷を食べながら頭を押さえたり、「お面が欲しい」とだだをこねたり、子供にとって「祭りは夜のもの」という印象が強い。それが子供心に染み込んだまま今に至り、そのために祭りのイメージが変わらずにいるのか。それとも夜の闇の魔力なのか。

そういう考えが基にあって、富来の八朔祭礼は「昼の祭り」なのか「夜の祭り」なのか、ということも知りたくなった。ここでは、その問いを念頭におきながら、富来の八朔祭礼についておもに地頭町がそれにどうかかわっているかという点から見ていく。

II. 八朔祭礼の概要

1. 祭りに関する地頭町の活動

八朔祭礼は正式には富木八幡八朔祭礼と言い、2日間に渡って行われ、初日をお旅祭り（オタビ）と呼び、2日目を本祭り（マツリ）と呼ぶ。この祭りは旧暦八月朔日に行われていたことから「八朔」の名称が来ているとされており、1995年の日付変更以前は新暦8月31日と9月1日に行われていたが、現在は8月13日、14日で行っている。この日付変更の件についてはV.で述べるつもりなので、ここでは八朔祭礼に関わる地頭町の活動が1年間の中でどういうふうになっているか、簡単にみていこうと思う。

まず初めは、例年1月20日に行われる区の役員の初総会¹⁾である。ここで祭礼当番、通称オヤドとなる人の発表が行われる²⁾。この祭礼当番は、かつては名誉職で、やりたいという人も多かったのだが、現在は今一つ人気がなく、この初総会のときに決定されていることは稀であ

るという。

その後は、7月に行われる役員会まで、特に動きはない。この役員会では祭りのスケジュール確認の報告と、太鼓関係者の役割分担といったことが行われる。

8月に入ると、そろそろ本格的に祭りに向けての人々の動きが始まる。日付が変わる前はお盆の晩から始めていたということである。この時期の活動の中心として祭礼壮年会によるキリコの紙張りや、「アサガオボンポリ」の取り付けなどがある³⁾。建部神社の草むしりや、小学生の子供たちの祭り唄の練習もこの時期に始まる。今と昔ではこの準備の様子が少し異なる。例えばキリコについてみると、昔は祭礼中のケンカが当たり前だったので、毎年作り直して、横紙を張り替え⁴⁾、絵や文字も毎年書かなければならず、大変だった。それに比べ、現在は人に見てもらおうという要素が強く、何よりも高価なものなので大事に扱うため保存も良く、何回でも使いまわしができ、ほとんど組み立てるだけで良くなってきているので、かなり楽になったという。ただ、準備が簡単になった分、片付けに時間がかかるようになった。

ちなみに、このようにキリコが「ミセモノ」という性質を帯びてくるようになったのは1955年頃からということである。ただ、一度に変わったということはないようで、「輪島塗りの高価なものなので費用もかかるし、おそらく小キリコから変わり始めただろう」ということである。中でも地頭町は変わり始めるのが遅かったということであるが、裕福な人の多かった商人の町である地頭町がキリコの新調という金のかかることを初めにしたのではなく、むしろ遅かったということはいったいどういうことを意味するのか。もしかしたら、「伝統」にこだわっていたからなのかもしれない。

祭りの2日ほど前には神輿の掃除が行われる。これは役員の仕事である。

そして祭りを迎える。祭りの当日の動きについては15章で述べている。

具体的な後片付けは、祭りに関わるものは役員や祭礼壮年会の人たちがする。道路の掃除は各家の前は各自が自主的に行い、露店が出ているところは露天商たちがごみを一まとめにし、その処分にかかる実費として約1万円ほどをおいていく。

祭りを終えた後、アトシキと呼ばれる反省会が行われる。この反省会には役員をはじめとして、太鼓関係者、祭礼壮年会が出席し、慰労会を兼ねたものである。反省会では、祭りの進行状況はどうだったとか、見物人の数はどうだったか、来年に向けての改善点はどうか、といったことが話題になる。これで祭りに関する地頭町としての動きは終り、翌年の初総会まで何もないという。本格的に動いていたのは約1ヶ月間ほどである。

2. 八朔祭礼の異名

八朔祭礼には「くじり祭り」や「ケンカ祭り」という異名がある。この「くじり祭」の異名は八朔祭礼が「卑猥な祭り」と言われる大きな要因でもある。

まず「ケンカ祭り」については、かつては本社へキリコが上がるとすぐにキリコ同士のケン

カが始まったということや、神輿やキリコの順番は予め決まっていたその順番を抜かすと即ケンカだった、ということからきているようである。また、人足といわゆるヤクザとの間のケンカというのもあったという。そのため、かつては金沢から機動隊を呼んでいたこともあったというが、そういうケンカも今ではめっきり少なくなって、警察もせいぜい交通整理に必要な数くらいしか動いていない。

祭りに起こるケンカの中でも毎年のようにケンカをしているような集落同士の間には次のような関係が出来上がっていたのだという。例えばAとBという集落のキリコがケンカをしたとする。その年はAのキリコが勝ったとすると、次の年はBのキリコが「去年の敵を」と意気込んで酒もあまり飲まず、夜まで体力を温存して置いて、前年の勝利に酔いしれて酒をあおっているAのキリコをたたきのめしに行くのだそうだ。昔のキリコは今のキリコとは違い、簡素なもので壊れやすかったという。そういうことだからキリコ同士のケンカも起き易かったのだろう⁵⁾。もし、昔から今のようにキリコの「立派さ」を競っていればキリコ同士のケンカは起きなかつただろう。

「くじり祭」については、まずは御神体にまつわる説がある。これは祭りの始まりとも深い関係にあるようだ。この説は神社の由来に関わるものでもあり、また、資料によって細かいところで食い違いがある。そこで、多くの資料に共通している部分を中心に組み合わせながら記すと以下のようなになる。

昔々、八幡浜⁶⁾に上がった御神体を見つけて急いで抱き上げて御助けした小釜（現在の里本江区小釜）の女がいたそうなの。それを見ていた領家町のサカヤの男はその御神体が欲しくなり、その女に「この浜辺は領家の浜、よってこれは領家町のものという因縁、わしによこせ」と言ったが、女は断った。しかし男はそんなことでは諦めなかった。頼んで駄目なら力尽くで取ろうと考えたのだろう。そのうち男と女で御神体の取り合いになった。そうこうするうち、男は名案を思い付いた。「相手は女。ならばその大事なモノに触れれば何か起こるはず」とでも考えたのであろうか。この男の行動にびっくりした女は思わず御神体を落としてしまい、男はしめたと、その隙に御神体を持って行ってしまった。

2つ目も良く知られる説である。『富来院の史と詩』には、領家町の男が小釜の女から御神体を奪ったときのことをきっかけに「神様が、クジレクジレの掛け声に官能ましますのをモジッタもの」(92) がクジレクジレの掛け声になったとある。そこから、祭りのときの掛け声がクジレクジレになり、見物の若い女性に向かって裾をまくる仕草をしていたという話につながっていき、「くじり祭」の異名が生まれたということである。「祭りのときは女性に対して何をしても無礼講」とまで言われたことがあったのもそういうところから来ているのだろう。そのため何年前までは若い女の子はミニスカートををはいて祭りの夜に出歩くのは危険と言われていたそうである。高校生以上の女性が祭りに参加することが禁止されているとか、参加しないと

いうのも、どうやらここにその一因があるようだ。

1998年の祭りのときでも、「若い女の子たちのほうがむしろ挑発的な格好をしている」ということが聞かれた。これは暑い夏に行われる祭りであるということと、今の世間の流行というものがこういう若い女性たちの姿を作り出しているとも考えられる。

Ⅲ. キ リ コ

キリコの数は各区によって異なるが、地頭町の場合は青年会（壮年会）と若連中（高校生）が担ぐ大キリコ、小若連中（中学生）が担ぐ中キリコ、子供連中（昔は小学4～6年、今は小学3～6年）が担ぐ小キリコの3種類があり、過去には寺地と登出に青年会用キリコ、若連中用キリコ、小若連中用キリコが各1本ずつ、子供連中用キリコが各2本ずつの計10本があったという。それが現在では人足の減少のために計6本にまで少なくなり、その内訳は小キリコ2本、中キリコ1本、大キリコ1本、「飾り用キリコ」3本となっている。

この飾り用キリコというのは、祭りには出ない大キリコのことと便宜上こう呼ぶことにする。昔は寺地と登出とで別個に出ていたキリコが人足の減少のために別々に出すことが難しくなり、現在のように寺地、登出、双方の人足を足して出すようになった。そのため、担ぐ人足のいなくなった大キリコを飾り用とすることにした。飾り用キリコは毎年交替で寺地と登出の大キリコを使うという。つまり、寺地から大キリコの出る年は登出の大キリコを服八酒店の所に飾っておき、その次の年は登出から大キリコが出ることになるので寺地の大キリコを能登信金の所で飾っておく、ということである。さらに大きい二十日会用、登友会用のキリコがあり⁷⁾、これまでは寺地の二十日会用キリコはハタノフォート横の駐車場、登出の登友会用キリコは大キリコと同じ服八酒店の所に毎年飾ってあったが老朽化しており、立てておくのも危険だということで1997年からは建部神社に保管してあるだけとなっている。中・小キリコの場合は、祭の日でもキリコが動く前などは、寺地のものはキリコの造りが雑だった頃には保管をまかされていた北國銀行の所に飾ってあったが、今ではJAの所に飾っている。ちなみに、1998年は寺地から大キリコを出したので登出の大キリコが飾られていた。

キリコの中でも大キリコに関しては、最も大きいもので17～18mあったという。そんなものはただでさえ大きくて重いうえに、キリコに結び付けられているタンナ（タツナ）⁸⁾でキリコを誘導するときにかかる力が加わることでキリコがさらに「重く」なる。これだけでも疲労がたまるのに、2日目にはさらに神輿も担がなくてはならないということを考えると、相当な疲労が蓄積されることは想像に難くない。なお、肩も痛くなるので、1日目も2日目も神社に着く頃には「手で持つ」ような感じになってくるのだという。

また、地頭町では1997年にはそれまでの33年間担がれてきた小キリコを2本新調（計380万

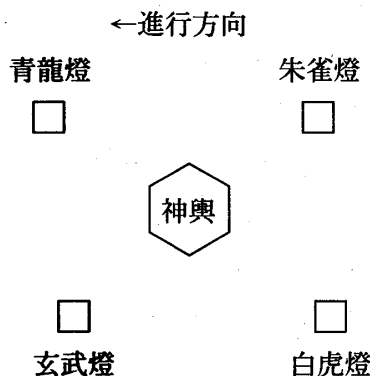
円) し、1998年には1999年の祭りに向けて中キリコを、こちらは35年ぶりに、新調(450万円)することになった⁹⁾。これを受けて、ある人は「祭りは廃れた、と言うが、こういう(祭りに関することに費用をかける)ことに反対する人はいない。道路工事とかにはかなり反発するのに」¹⁰⁾と言っていた。やはり祭りというのが心のどこかで特別なものなのだろう、ということを感じさせるエピソードである。

これらのキリコの保管場所だが、新調された小キリコが1本、領家町にある「ふるさと文化センター」に陳列という形で預けているほかは、すべて建部神社に保管されている。大きいものは解体して収納して箱に入れて中二階に上げておき、小キリコはそのまま倉庫に入れておくそうだ。

八朔祭礼におけるキリコの役目は富木八幡神社の男神様を迎えに行くときの灯りであるという。なお、現在のキリコはほとんど全てバッテリーが付けられていて、昔ながらのロウソクの灯りを点けるキリコは登出の大キリコのみとなっている。いわゆる「伝統を守っている」ということになるのだろう。

これらのキリコのほかにオタビの日にはレンガク(田楽)と呼ばれるものが出る。形が豆腐の田楽に似ていることから「田楽」と呼ばれるようになり、それがなまって「レンガク」と呼ぶようになったのではないか、ということである。これは領家町の所有で、計4本あり、それぞれに四聖獣と呼ばれる、青龍・朱雀・白虎・玄武の名称が当てられ、青龍燈、朱雀燈、白虎燈、玄武燈と記されている。このレンガクはオタビのときに富木八幡神社の神輿の周りについて領家町の産土社である住吉社を目指す。ただし、富木八幡神社からついていては、神輿が本社を出て浜中まで来てからついて行く。これには理由がある。領家町の神は女神であり、レンガクはその住吉からの使いであるから、浜中より先には入れないのである。

図-1: レンガクの位置



この「浜中より先には入れない」という考え方には、2通りの解釈ができる。1つは、この浜中が男神である富木八幡神社の空間的領域の境目になるため、女神の使いはそこから先に行くことを許されない、というもの。もう1つは、「夜這いに行く」¹¹⁾のにわざわざ玄関まで迎え

に来てもらうということは不自然だから、というもの。これが神輿やキリコが浜中の三叉路のところでわざわざ遠回りすることの理由にもつながっていく。つまり、この三叉路で遠回りをせずに直進で進んでしまうと、レンガクが浜中で待機することの意味がなくなるというわけである。行程の変更でもここを遠回りすることが維持されたのはそういう意識が強くあったためであろう。¹²⁾

IV. おはやし

1. 太鼓、鉦

太鼓には太鼓を担ぐための「太鼓人足」というものがある。地頭町の場合は人足の不足という問題が生じていなかった頃は青年会の人達が太鼓人足も兼ねていたそうであるが、今は厄年の人が厄払いの意味で太鼓人足になるほか、二十日会、登友会の人達が主に太鼓人足を担っており、区や青年会の協力という形で太鼓人足になる人もいる。また、太鼓人足には人足担当割というものがあり、1998年の場合は13日午後5時（当番宅集合）からと、14日午後0時30分（当番宅集合）から午後6時までと、同午後5時30分（八幡通り集合）からの3つに分かれる。太鼓人足のハッピー¹³⁾は1982年にできたのだが、色がピンク色になった。

また、太鼓を担ぐ人とは別に太鼓を叩く人もいる。これは鉦を叩く人とともに以前は祭礼壮年会が在所の中から謝礼を出して雇っていた（頼んでいた）ということだが、今は区から補助金が出て、二十日会、登友会で行っている。ただし、今でも1人だけ日当で雇っている。その人は叩くのが上手な上に責任感があるので、酒を飲んで酔っ払って、途中でどこかに消えることがないからだという。地頭町ではこの太鼓や鉦を叩く人が4人いて、太鼓に2人、鉦に1人、予備に1人となっている。彼らには専用の正式装束がある。この正式装束もハッピーと同様に各区によって違うが、主に鳥追笠、袖のない着物、たすき、脛当からなっており、だいたいどの区でも似たような格好になっている。

太鼓や鉦の旋律は凱旋太鼓と呼ばれる叩き方であると言われる。太鼓は「ドコドコ」の繰り返しであり¹⁴⁾、鉦はその「ドンドコ」の「ドン、ド」に合わせて「カン、カン」と鳴らす。これが各集落ごとにおける叩き方であるが、それを全集落が叩くので集落ごとに叩き出しがずれたり、太鼓から太鼓までの距離があたりなどして、聞いている限りでは「ドコドコ、カンカン」というリズムに聞こえ、それが延々と続くことになる。太鼓を叩く人が太鼓の両側に立って太鼓を叩くのだが、その際、進行方向に向かって右側に立つ人は「ドンドコ」ときちんと叩くのに、左側に立つ人は良くて「ドコ」の部分しか叩かず、しかも、たいていは踊りながらである。ときには太鼓から離れたところで踊っている人もいる。

太鼓には「ドンドコ」以外に「八幡太鼓」がある。神輿やキリコが休んでいるときや、本祭

りの日には、住吉社で神事をしているときに、境内の真中に八幡の太鼓を置き、祝詞をあげている間、八幡太鼓保存会の子供たち「八幡太鼓少年倶楽部」が叩く。「少年倶楽部」とは言うが、女子もメンバーになっている。その後、人足の中でも太鼓の好きな人達が2人組ずつで代わる代わるに叩いたりする。1998年の場合は同年8月1日に移転、開院したばかりの町立富来病院正面入口のところでも少年倶楽部の子供たちが叩いていた。神事が終わり神輿が通り過ぎる頃に富来病院の前で叩くのも以前から行われていたということである。ここでは住吉社で叩いていた子供とは違い、割と年齢の低い子供たちであった。¹⁵⁾

太鼓や鉦とは別に、「ジャンジャン」と呼ばれるものがある。叩かれるものは一斗缶で、側面には赤と緑の2色が塗ってある。用途はキリコや神輿の動きを制御したり¹⁶⁾、祭り唄のおおやしにする、といったところである。

ドンドコにしても、このジャンジャンにしても、普段は「太鼓」、「一斗缶」と呼んでいるものが「祭り」という場で使われることによってその名称が変わるということは、やはり、「祭り」と「日常」という違いがそこに生じているのではないだろうか。

太鼓と鉦の保管場所は地頭町では建部神社の倉庫である。やはり神社の持ち物だからということなのだろう。

2. 祭り唄

祭り唄はキリコや神輿を担ぎながら唄われる。誰かが唄い出すと一緒に担いでいる人足たちもそれに併せて唄い出す。今ではほとんどのキリコにマイクがつけられていて、マイクを握った人が唄い出すと、他の人足も唄い出すというふうになっている。マイクがつくようになった理由に、若い人の声が小さいからマイクがないと聞こえない、ということがあるらしい。

また、祭り唄は元来自分で創るものであり、その結果、祭り唄の歌詞は膨大な数に上るといえる。それが現在は「今の若い人達はあまり祭り唄を知らない」ということになっている。昔は学校の指導で覚えるのではなく、祭りのときや日常生活の中で覚えていった。具体的には、地頭町の場合、お盆が終わった頃から神社の境内で子供たちが集まって年長の子が小さい子に「○曲歌えたら合格」という形で教えていたそうだ。このほか、現在学校で教えているような唄ではない「裏唄」は、祭りのときに耳で覚えていったという。現在では学校の指導の下、朝のラジオ体操の後、3年生から6年生の子供同士で練習をし、6年生が教える。この辺りにかつての名残がうかがえる。それはそれとして、今のように学校で祭り唄を教えることにはほかにも意図がある。祭り唄の正常化である。

八朔祭礼が「卑猥な祭り」と言われる理由の1つとなっているのがこの祭り唄ということである。そのため祭り唄を伝統として後世に残していくには「きちんとしたきれいな」祭り唄を子供達に教えていかなければならない、ということのようだ。祭り唄の正統化、正常化というのは昔から言われていたようである。そのために祭り唄正常化委員会（健全な唄の保存会）と

いうのができて、小学校では歌詞を書いたプリントをつくって生徒に配り、練習をしている。そのプリントには1番から60番までの歌詞が書かれている¹⁷⁾。また、祭り唄正常化委員会の人々が、祭りの最中に祭り唄を唄いながら練り歩いている各区のキリコを見てまわって審査をしている。上手に唄っていたとか、「優秀な」唄を唄っていたなど、その態度も考慮に入れて審査をし、「優秀」と評価されると、「祭り唄正常化運動優秀賞」のリボンが与えられ、そのリボンをキリコにつけておく。リボンが贈られるのに改まった場は設けず、オタビの日に浜坂下でキリコが集まっているときや、そのほか、休んでいるときなどに委員の人たちから手渡しされるのだそうだ。対象は子供から大人までのすべてのキリコということである。ちなみに、誰が唄の審査をしているのかは、子供たちにはわかっているらしい。

その成果があつてか、Kさん(40歳代の女性)の話では1998年の祭りでは「男の子たちの方が上手いで、負けたくない。キリコに張って、それ見ながら唄いたいから歌詞のプリントちょうだい」と言ってきた女の子たちがいたそうだ。今の段階では子供達の間での競争心に止まっているかもしれないが、いずれは「正しい祭り唄」がしっかりと形作られ定着して後世に残ることになるだろう。

話を少し戻すが、「卑猥な祭り」と言うことに対してこういう意見も聞かれた。「祭り唄に卑猥な言葉が入っていても、それを自分たちの言葉で歌詞にかけて唄っているから、他所の土地の人が聞いても分かるはずがない」とか、「地元の者が自分たちの祭りを‘卑猥’と言うが不思議でならん」、「全国的にみればこの祭りはまだかわいいほうだ」などである。ただ、それが少数派の意見ということなのか、それとも時代の流れのためなのか、そのところは深く知ることにはできない。また、現在のように徐々に卑猥なイメージを無くそうとする動きが続いていけば、将来は卑猥という言葉も聞けなくなるときがくるかもしれない。

V. 日付変更とその影響

1. 日付変更

冒頭でも述べたようにかつて八朔祭礼は旧暦の八月朔日に近い9月1日を本祭り、その前日の8月31日を御旅祭りとし、2日間にわたって行われていた祭りである。それが1995年からはお盆と重なる8月13日、14日の2日間に行われるようになり、この日付変更と共に祭礼における神輿の行程も変更された¹⁸⁾。

日付変更には2つの理由がある。1つ目は最大の要因である人足不足のためということ。これは町の若い人達が都会に出て行ってそのまま都会に住み着いてしまうということや、少子化などによる人足予備群の減少がその原因となっているようである。そこで、少子化はどうすることもできないが、お盆になら都会に出た人達も墓参りのために里帰りをするだろうから、そ

の帰って来た人達に人足になってもらうという算段である。こういう人のことを俗に「タビの人」と言い、青年会の不在会員という立場にあるとされる。彼らが参加するかどうかは本人から直接か、あるいはその親から連絡があるということである。

2つ目は学校の関係である。祭りが8月31日、9月1日に行われると、本祭りの日は普通始業式だけなので、それほど支障はないのだが、祭りの終わった後にすぐ新学期が始まるので、次の日から授業をしたとしても、しばらくは祭りの余韻がまだ残っていて、授業に集中せず、勉強に身が入らないから良くないということである。小学校や中学校は町立なので9月2日を休みにすることが可能であるとしても、高校の場合は県立なので、町の祭りを理由に学校を休みにすることはできない、ということから、富来高校は20年ほど前から祭りを夏休み中にするように要求してきていた。

日付の変更には、祭りに参加する区の役員たちが集まって何度も話し合いを行った。そこでは日付をいつにすれば良いかということと、祭りの時間短縮に関し行程の変更が話し合われた。日付の変更については2つの案が出ていた。現在行われている8月の13日、14日とする「盆案」と「八朔」という名を維持するための7月31日、8月1日とする「八朔案」である。地頭町は「八朔案」を支持した。「八朔案」にはほかに高田が賛成したが、その他の祭り参加集落は「盆案」を支持し、多数決の結果、現在の「盆案」が採用された。地頭町が八朔にこだわったのは、地頭町の人達の祭りに対する意識によるものと考えられる。特に年齢が上に行くほど、お盆に行われる今の祭りに良い印象を持っていない。それに地頭町の町の商店街にとってはお盆に祭りを行うということが大きな痛手となっているようである。「(商店街にとっては)常に儲かるようなイベントがあれば良いが、(盆と祭りの)2つが一緒になったことで儲けが全体として下がるのに、一度に忙しくなった」というK氏(50歳代の男性)の言葉がそれを良く表している。また、既婚女性にとってもこの変更はあまりうれしいことではないらしい。と言うのも、一度に親戚が集まるので忙しくてたまらないとか、祭りと盆が一緒になったことで自分が盆に実家に帰れなくなったということもあるそうだ。

八朔祭礼壮年会の動きとしては、「八朔祭礼はどうあるべきか」と題したアンケート(「広報とき」No.288、1995年3月号)を行ったことが挙げられる。しかし、日付変更についての議題は上ってこなかった。八朔祭礼壮年会はそのことについて不満を持ち、これ以後、「解散状態」になって「祭礼に関わらなくなった」。つまり、八朔祭礼壮年会はそれまでは祭礼の日程についての話し合いに参加していたのだが、それを止めてしまい、今では祭りでのケンカを防止するためと、親睦を深めるためだけの存在になっているという。

2. 露店、五日相撲

地頭町に限って言えば、日付変更後も日付変更前と変わらず同じ日時で行われている行事がある。露店と五日相撲(一掛相撲、祝い相撲)である。露店は9月1日～5日の間に催される。

今でこそ建部神社参道沿いと境内だけで、飲食系の露店が中心となっているようだが、多いときには商店街の大通りには、西側はJAから服八酒店まで、東側は富来ストアからとくだストアまでで、最も多かったときは、北側は地頭町と高田の境までであった。このほか、建部神社から商店街へと続く参道沿いと境内の中、大橋通りでは領家町のT字路から本光寺に突き当たるまでの道沿いに立ち並ぶ。当時の露店では金物や陶器、傘、ガマ油、農具、下駄など生活に使う日用品が中心に売られていたほか、催し物として、のぞきからくり、サーカス、相撲などが行われ、まさになんでも揃っていたようである。どこにどんな店が出ていたかという、瀬戸物などの類は大橋通りの中林造花葬祭から本光寺までの間、唐傘、番傘などの傘類は商店街の参道前から大橋通りとの交差点までの間、境内の前にはサーカス、JAのところではヘビ使いという具合だったそうである。また、わたや旅館の前には必ず瀬戸物屋が出ていたという。一例として、唐津の皿などは20枚単位で買っていたそうだ。この5日間に1年間で使う道具のほとんどをここで買っていくということが行われていた。そもそも当時は商店街が地頭町にしかなかったこともあり、この5日間は露店の立ち並ぶ通りは人があふれており、歩くのにも苦勞をした。さらに、市の最後の日である9月5日には「ナゲウリ」といって、それまでよりも安い値で物が売られていたという。露店を出す香具師の人たちにしてみても売れ残るよりはましということなのだろう。また、香具師たちは間借り賃として、1938年頃で30銭～50銭ほど¹⁹⁾を感謝の意を込めて出していたということである。現在は2～3万円ほどだそうだ。

露店の人達は全国を回っていて、1年間のスケジュールが昔から決まっているため、いまさら祭りの日付が変わったからと言って簡単にスケジュールを変えるようなことはできない。この人達のためにも祭りは元の日付（8月31日、9月1日）に戻した方が良いという意見もある。

五日相撲は「祭りの5日目」に当たる9月5日に行われることからこう呼ばれており、能登の有名な相撲の1つと言われる。昔は露天商が客寄せのために商店と協力して領家町で格式の低い相撲大会を9月2日に開催していたが、20年ほど前に領家町の若者が相撲大会の開催資金を酒に使い込んでしまったという事件があった。それを機に、相撲大会を地頭町青年会主催の出世相撲として格上げし、現在の五日相撲になったという。その後、この五日相撲で優勝した人が羽咋で行われる唐子山での相撲大会へ出場することができるようになったとのことである。五日相撲に参加する力士には、昔は富来出身で大学に入った人が大学の後輩を連れてきたり、大相撲の十両以下に同じ学校出身の人がいたら呼んだりしていたし、今は金沢市立工業高校の相撲部の生徒や、近在の力士などが多く、数があまり集まらなかったときなどは自衛隊の人たちに協力してもらったりしているそうだ。この五日相撲も現在ではやや衰退し、青年会ではなく、富来町相撲協会や商店街が主催し、資金も商店街が出すようになっている。

この他、9月1日には露店を盛り上げる目的で保育所の子供たちがキリコを担いで1時間ほど練り歩いたり、地頭町商店連盟では八朔祭礼の名残を留めるために8月31日か9月1日のど

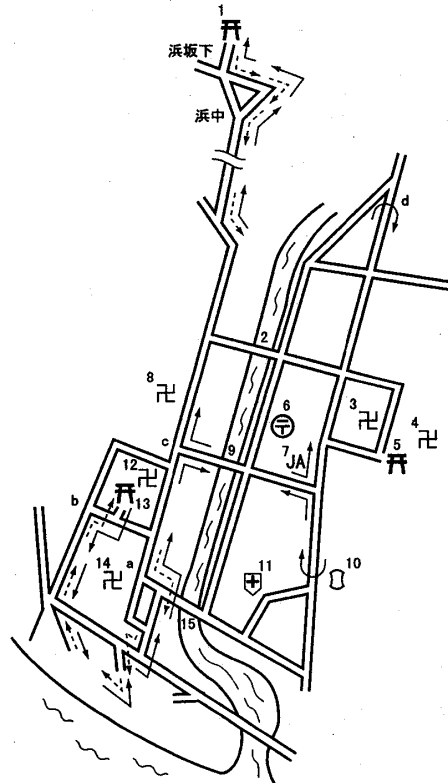
ちらか1日だけ「八朔夏祭り」を行ったりしているということである。この八朔夏祭りもなるべくなら土日当たるようにしたいという主催者側の意見も出ている。

3. 変更前の行程

行程の変更は先にも延べたように祭りの時間の短縮を目的にしたものである。変更後の行程は15章にゆずり、ここでは変更前の行程について記す(図-2)。

図-2：八朔祭礼行程図

- > : オタビ
 ——> : 本祭り
1. 富木八幡神社
 2. 富来大橋
 3. 本光寺
 4. 本隆寺
 5. 建部神社
 6. 富来郵便局
 7. 富来町農協会館 J A 富来町富来支店
 8. 徳照寺
 9. 新橋
 10. 能登信用金庫
 11. 富来病院
 12. 西光寺
 13. 住吉神社
 14. 恵光寺
 15. 浜の橋



オタビの日は富木八幡神社を出て領家町に入り、その後、a地点を左折、浜の橋の手前で右折、そのまま国道249号線を横切って八幡浜に降り右に曲がって浜を練り、領家口の信号につながる坂を登り、再び国道249号線を横切って直進、b地点を右折して住吉社の参道に至り、境内に入る。

本祭りの日は住吉社の鳥居をくぐって出た神輿は右に曲がってc地点までオタビのときと同じ道を逆に走る。そしてc地点を右折して富来大橋まで直進、大橋を渡って地頭町の商店街に入る。商店街に入り、神輿は左折して高田へ向う²⁰⁾。高田に入ってd地点まで行き、そこで折り返して今度は能登信用金庫の交差点まで行き、さらに折り返して再度、富来大橋を渡って領家町に戻り、右折して富木八幡神社に向かう²¹⁾。この先はオタビの日に通った道に戻って行く。

また、地頭町の商店街を往復していたということについては、定かではないが以下のような理由があるようだ。かつての神輿の行程では高田まで行って折り返していた。その折り返し地

点にはかつてウエシマヤシキ（ウエジマヤシキ、上島屋敷）と呼ばれた庄屋らしき人の家があり、その家へ行くと、今なら役員などにあたる偉い人たちは御膳が、それ以外の人足にもフルマイザケがもてなされたということである。また、御機嫌伺いに行っていたのではないか、ということも言われている。そして南の能登信用金庫のところで折り返していたことについては、地頭町のオヤッサマの住む範囲がそこだったということである。つまり、まずオヤッサマがあってそれから地頭町内での神輿の行程が決まったということである。それは地頭町が祭に関わる経費のほとんどを出していたということとも密接な関係にあると町の人はいう。

VI. お わ り に

以上、地頭町の人々がどのようにして祭りに関わっているかということのわずかの断片でも知ることができたような気がする。そのなかでかつての祭りを何度も経験したことのある多くの人が、祭の日付変更についてあまり良く思っていないらしいことに気づいた。日付変更の決定のときにあくまで、「八朔」の名を残そうとした「地頭町」だからこそ、日付変更に対して否定的なのか。

八朔祭礼はその長い歴史の中で一度も中止をしたことのない祭として現在まで続いているが²²⁾、日付変更はその歴史に大きな変革をもたらしたと言えるだろう。

多くの集落の参加によってなりたっている八朔祭礼のありかたには地頭町の持っていた政治的、経済的な力が影響を及ぼしてきた。しかし、その地頭町の影響力が失われつつある現在、八朔祭礼の持つ広域性が失われかねない状況にある。ひょっとしたら現在の八朔祭礼に参加している集落がそれぞれ独自に祭りを行うようになり、八朔祭礼は元々の形である領家町と八幡のみの祭になるかもしれない、という人すらいる。

最後に、冒頭で提起した「祭は夜のものか昼のものか」と言う自分の関心について考えてみたい。1日目と2日目とで分けてみると、1日目は「夜の祭り」である。群れをなすキリコの幽玄な灯火がそれを象徴していると思った。2日目は「昼夜の祭り」であり、比較的昼に中心があるように思う。10体を越える神輿が町を練る姿は太鼓の響きと相俟って凄みのあるものである。それに本祭りも夜遅くまで続く。付け加えて言うなら、行程変更によって通らなくなった八幡浜で打ち鳴らされる太鼓や浜を走り抜ける神輿の姿が、今では映像記録でしか見ることができないのが物寂しい。

注

- 1) 初総会は地頭町では1月20日に行われているが、他の区では1月の第3日曜日など、決まった日は設けていない。

- 2) 祭礼当番については15章参照。
- 3) キリコは別称としてオアカシ、奉燈とも言い、富来では「オアカシ」を使うのが普通ということだが、ここでは一般に通用されている「キリコ」を使っていきたいと思う。また、「アサガオボンボリ」とはキリコに着けるぼんぼりのことだが、朝顔の形に似ていることからこの名がついている。八朔祭礼に出るキリコのぼんぼりは皆、この形である。紙を貼るのは表具屋や印刷屋などの業者に委託していた。
- 4) かつては子供たちも準備に積極的に参加していて、祭りよりも「祭の準備」自体を楽しみにしていたというほどである。そこには現代には失われつつある先輩、後輩という関係が自然に出来上がっており、子供たちはそういった関係や地域の風習などを通していろいろなことを学んでいたものだったという。また、「このことと現在の社会の出来事との間には何らかの関係があるかもしれない」という声を聞くこともできた。
- 5) あるいは逆に、ケンカをしてもそれほど損害が出ないように、わざと簡素なものにしていたのかもしれない。
- 6) ヤハタハマとも、ハチマンバマとも読み、八幡馬場（ハチマンババ）と呼ばれることもある。増穂浦のことを祭りに関してはこのように呼ぶ。
- 7) 青年会第1支部を出た人たちの組織を二十日会、第2支部を出た人たちの組織を登友会と呼ぶ。それぞれ40～60歳くらいの年齢層である。また、はっきりと確認したわけではないが、ここで言う二十日会用、登友会用キリコというのはかつての青年会用キリコに、大キリコというのがかつての若連中用キリコにあたるのではないと思われる。
- 8) 青年会 OB や厄年の人が引き、この人たちのことをタンナモチ、あるいはタツナモチと呼ぶ。
- 9) 八朔祭礼に先駆けて1999年7月18日に地頭町だけで、この新調した中キリコのお披露目祭りを行うことになっている。
- 10) この道路工事というのは都市計画の一環として行われている道路拡張工事のことを指しているようである。この工事によって家の建替えや改築・改装、移転・立退きといったことが必要になる。これにかかる費用は国、県、町などから補助金が出て、各家庭における負担はおよそ1割程度ということであるが、手続きが面倒だとか、住みなれた場所を離れるなどの精神的負担といったものが反対の声になって現れているようである。
- 11) 誤解を招くといけないので一応説明しておく、「夜、こっそりと女のもとに通う」という意味で使っている。
- 12) 寺地と高田、登出のキリコが大きすぎて富木八幡神社に入れなかった頃、それらのキリコはこの浜中で待機していた。
- 13) 昔のハッピーは、今とは違って各区ごとのハッピーというものがなかった。しかしそれでは、ケンカが起きたときにどこの区の者がケンカをしているのか、ということが分からないという事で、住吉社にすべての神輿が集まるようになった頃に各区ごとのハッピーを作るようになった。その頃は地頭町の中でも登出の「腰に波」と寺地の「波に千鳥」とに青年会のハッピーの模様が分かれていた。ちなみに色は双方とも紺色であった。地頭町のハッピーの模様が今のように統一されたのは1982年のことで、この時、太鼓人足のハッピーと子供・小若のハッピーもできたということである。模様は波に瓢箪で、色は若

連中・青年会が空色、子供連中・小若連中が緑、太鼓人足がピンクである。背中についている紋は寄付をした「ジュナイ」の紋であって、建部神社の紋ではない。建部神社の紋は正式には「三本杉」である。それからやや遅れて区の役員のハッピーができたという。それまでは区の役員は背広姿とか、各自の家にあるハッピーを身に着けていたそうだ。

14) この「ドンドコ」は祭り時における太鼓の別称でもある。

15) 現在、富来町全体の組織として八幡太鼓保存会というものがあり、保存会自体は太鼓の好きな人の集まりということである。活動としては敬老会の場合や老人ホーム、結婚式などで披露したり、子供に教えるなどである。富来小学校では学校の課外活動として毎週月曜日に校内にある柔道場の必成館（富来町少年育成道場）を借りて練習しているという。最初のうちはこの柔道場を使うということで、柔道部に入っている生徒がそのまま八幡太鼓保存会のメンバーになっていたという。

16) 実際にキリコや神輿の動きを制御するのは今ではほとんどがホイッスルで行われている。

17) このプリントと若干異同のある歌詞が「公民館報とき第22号」の中に紹介されている。キングレコードより「富来祭り唄」が発売されることを知らせる文章の一節である。

「尚歌曲は此の土地に唄っているのを少し変へてあるようですが、歌詞は

- 1 高い山から谷底見れば瓜やなすびの花ざかり
- 2 来るか来るかと浜へ出て見れば浜の松風音ばかり
- 3 娘島田に蝶々が止まる止まるはずだよ花じゃもの
- 4 わしの心とあら磯の山は外に木がない松ばかり

右の四曲ですが唄の調子では本当の唄の方が良いが発売禁止になる慮があるのでこの唄にしたそうです。」

このうちの4番はよく似たものはあるが、「あら磯の山」の部分プリントでは「荒木の山」になっている。なお、「此の土地に唄っているのを少し変へてあるようですが」とか「本当の唄の方が良いが発売禁止になる慮があるので」という部分をみる限りでは、この土地に長年受け継がれてきた唄の多くは裏唄であったと考えられる。

18) ただし、日付変更以降も8月31日、9月1日には神事だけは毎年行っている。

19) ちなみに、その当時で大工の1日の稼ぎが約70銭で、それでは酒1升を買うこともできなかったそうである。

20) この途中、本来なら富木八幡神社に神輿を寄進したシモジロウの家に立ち寄るのだが、現在はそこにシモジロウの家はなく、呉服丸宮が建っており、神輿もここに立ち寄ることはなくなった。

21) 大橋を右折してすぐの所にあるサカヤの家に神輿が立ち寄る。

22) 第2次大戦中にも、派手には行わなかったが、少なくとも鉦と太鼓は出ており、神事だけは行っていたという。神輿については「出していたと思う」という人もいれば「神輿は出さずに神主が御神体を籠に入れて運んでいた」という人もいて整理がつかない。